



FUJIEDA ROTARY CLUB
藤枝ロータリークラブ会報
 例会：毎週水曜日 小杉苑 藤枝市青木2-35-30 TEL 054-641-3321
 事務局：藤枝市青木1-11-10 TEL 054-647-2300 FAX 054-647-2040
 URL <http://www.fujieda-rotary.org/> E-mail club1972@fujieda-rotary.org



【富士山】
 写真提供：櫻井 龍太君

ロータリーを実践しみんなに豊かな人生を

会長：大塚 博巳 副会長：池ノ谷 敏正 幹事：森下 敏顯 副幹事：鈴木 舜光

第2033回

- ソング 我が藤枝ロータリー
- ソングリーダー 玉木 潤一郎君

会長報告

大塚 博巳君

・2014 ソチ冬季五輪が閉幕
 “2014 ソチ冬季五輪”が、スポーツ独特の“数々の新しいドラマ”を残して2月23日閉幕しました。



“オリンピックはスポーツの祭典”として華やかに開催されましたが、世界の争事に巻き込まれないよう、ロシア政府は威信をかけてテロ対策を実施していたようです。「平和と争い(危険)は紙一重」が現実であることを“平和な日本人”としても知っておかなければなりません。

そんな中、日本人選手も頑張り、メダル数は1998年の長野オリンピックの10個に次いで、「金1個、銀4個、銅3個の計8個」でした。「よく頑張った」との声も沢山ありました。一方、『“スポーツ分野でのアジアで一番 = 国民のプライド“になるために、各競技団体が中心となって、「技術力、精神面」等を向上させる為の方策(施設・条件も含め)を考え、国(政府)の資金援助を仰ぎ強化すべきである。』というスポーツジャーナリストもいました。私も藤枝市体育協会の役員を務めていますので同感であり、個人的にも願っています。

次はパラリンピック(3月7日～3月16日)始まりますので同様に応援したいと思います。

- ・ 2月は「世界理解月間」
 先週は、大長会員のハルモニアへ勤務している「マ・ナンダー・マウンマウン(ミャンマー)」さんが卓話をして戴きました。
- ・ ミャンマーという“国の特徴”の説明、また国民性は穏やかな国民が多い

- ・ ミャンマーに進出している日本企業は、ここ数年で3倍に急増している
- ・ ミャンマーと日本の福祉の違い etc
 ナンダーさんの「日本の福祉」を学ぶ熱意、意気込みには感心しました。
 また、ロータリークラブでは多くの奨学生(留学生)を受け入れ、卓話を聞きますが、それぞれ「自国のプライド」、また「日本での学ぶ目的」をしっかりと持っている姿勢を感じます。

私たちは今後も、様々な外国人の方との交流を通して世界を理解するチャンスに繋がりたいと思います。

- ・ 静岡第5分区インターシティミーティング
 次の日曜日は3月2日「インターシティミーティング」で、榛南RCがホストクラブとなっております。

今回は、藤枝南クラブと一緒に大型バスで行く予定です。出席を予定している会員の皆さんは時間を間違えない様、よろしくお願い致します。

今日は久島会員の会員卓話です。よろしくお願いいたします

以上、会長報告といたします。

幹事報告

森下 敏顯君

- ・ 第2620地区より
 3月のロータリーレートのお知らせが届いております。
 1ドル=102円です。

出席報告

久島 正史君

| 本日のホームクラブ出席者 | 前回の補正出席者 |
|--------------|--------------|
| 34/41 82.93% | 35/41 85.37% |

(1)欠席者(事前連絡とメイクアップをどうぞ)

○江崎晴君 ○河井君 ○小泉君 ○仲田廣君
○間野君 大杉君 仲田晃君

■ ビジター

伴野 正明君(藤枝)

■ 会員卓話

あの頃のこと

久島 正史君



「男はつらいよ」の寅さんではないけれど、若い頃のことは、思い出すだけに恥ずかしく、とても皆様の前で披露できるものではありません。そこで、今回のお話は、小さい頃の一場面。しばらくお付き合い願います。

生まれは、東京、神奈川の県境にある、山梨は「上野原市」の山間部。

生まれた時、人相見は「この子は一生お金に不自由しない」と言ったそうです。何回も聞かされた話なので、いつかは金持ちになると考えていましたが、一向にその兆しがなかったので、母に尋ねたら、「不自由しないとは言ったが、金持ちになるとは言っていない」

漫画がとにかく好きでした。小学校3年生までは漫画ばかり。母親は心配して先生に相談に行ったくらい。少年倶楽部、少年画報、ぼくら、少年サンデー、少年マガジン等々。なつかしいのは、「いがぐり君」、「スポーツマン金太郎」。近所には、同級生がいなかったため、いつも一人で漫画の主人公である自分を空想しながらの登下校。漫画が心配なものだから、親が次に与えたのが、冒険読み物。それから、岩波の少年少女文学全集。

「エミールとオタバリの少年探偵団」、「ツバメ号の伝書鳩」、「洞窟の探検」等々。確かにそれは、漫画以外のものに目を向けさせるという意味では効果があったと思います。しかし今度はそれを読みふける毎日。お陰で、冒険も魔法の指輪も杖も出てこない小説など、読む気もなくなっていました。本は確かに好きでしたが、回りは、山ばかりでしたから、今ふうに言えば、自然の中で遊ぶことが日常でした。

一つだけ強く印象に残っている思い出。あれ

は、多分小学校2～3年生の6月末のころ。暖かくてやわらかい雨が降っていました。体が小さく、傘が重いので肩に担いで、溝の中の沢蟹を追いかけての帰り道。そのとき、ふと見上げると、回りが総て黄緑色の世界。なんてきれいな色なんだろうと思って、いまでも、たまにその時のことを思い出します。



(担当/菅原君)